



「効果的な学校」の構築は校長の使命

新潟県小学校長会 副会長

荒木 正

全国学力・学習状況調査結果を分析したある大学の「学力に影響を与える要因分析に関する調査研究」によると、保護者の収入や学歴などの社会経済的背景と子どもの学力は相関関係にあることを指摘している。そんな中で、学校の要因により成績を伸ばすことができている学校があるという。いわゆる「効果的な学校」である。

この「効果的な学校」の取組に注目したい。例えば、「活用力を見る問題」で成果を上げている学校は、「授業研究の充実を基盤に、「教科を超えた研究授業をし、教員は協力し支え合う意識が高い」「発展的な学習より基礎基本の定着を重視している」などの特徴があるという。一見平凡な感じもするが、校長としての感覚で、「教師集団としての機能している学校」「学校として一貫した考えの下、取組を進めている学校」と言い直してみると、校長の学校

経営の一端が見えてくる。更に、私には、教師集団が作り出す磨き合い高め合うというある種の学校文化が創造されているのではないかと感じられる。

私も、授業研究を学校づくりの中核に位置付け、提案性のある授業公開、そして、検討会となるよう取り組んできた。教師間のコミュニケーションや価値観の共有が進んでいく手応えを少しずつ感じてはいるが、まだまだ、求める子ども像や教師個々の学力観の違いを乗り越えていくとする気概は見られない。どこの学校でも同じような状況ではないだろうか。

しかし、今の時代であるからこそ、校長は、教職員と協働して学校文化の創造という共通の目標に向かって取り組むことが求められている。「効果的な学校」の構築は、校長の使命であることを肝に銘じなければならない。

平成二十七年度

第一回県小評議員会（報告）

日時 六月二十三日（火）十四時～十六時
会場 上越市「高陽荘」

一 開会の挨拶 近藤会長

関プロ新潟大会は、「おもてなし・本丸は分散会・校長が主語」のスローガンが達成され、他県から高い評価を得た。東京大会では、「分散会で提言までもっていく」との方向である。次年度も、新潟県及び新潟市のレベルの高い実践をもって提言に臨みたい。

二 議長選出 小林評議員

三 議事

（一）報告

1 会務報告

2 全連小関係・関プロ関係

3 県小代議員会燕・弥彦大会関係協議

（二）

1 各部の事業計画について

（1）制度部 新井理事

ア 各市町村における教育関係予算等に関する調査研究

イ 特別支援教育の充実に関する調査研究

（2）福利部 逢坂理事

ア 教職員の給与、処遇の改善を図るための調査研究活動や要望活動等の推進

イ 教職員の福利厚生に係る関係機関・団体との連携と福利厚生関連事業の充実を図る活動の推進

（3）研修部 湯本理事

ア 関プロ新潟大会兼全県研究集会

イ 全連小山口大会への参加

ウ 三委員会の調査研究活動等

エ 全国人権・同和教育研究（長野）大会

（4）広報部 金子理事

ア 初等教育と校長会報の発行

イ 調査研究活動報告書の発行

ウ ホームページの運用

エ 全連小広報部との連携

オ 広報活動の在り方の検討

2 関プロ新潟大会の反省

3 全連小山口・高知大会、関プロ東京大会

4 日本教育会全国大会新潟大会

5 平成二十七年度要望書の作成

四 連絡

（一）平成二十八年度県小代議員会

・ 期日 五月十一日（水）

・ 主管 柏崎市刈羽郡校長会

・ 全連小刊行物の案内と購読

（二）平成二十七年度日本教育会新潟県支部総会・研修会

・ 期日 七月十一日（土）

・ 会場 長岡市「アトリウム長岡」

・ 講師 長岡国際交流センター長

五 閉会の挨拶

荒木副会長

関東甲信越地区小学校校長研究協議会 新潟大会を終えて

新潟県小学校長会 研修部長

第六十七回関東甲信越地区小学校校長研究協議会新潟大会が六月十一・十二日に朱鷺メッセを主会場に開催され、一都九県から千人を超える校長が集まった。

近藤会長が掲げた本大会のスローガンは次の三つである。

一 おもてなし

おもてなしに関しては、新潟市小学校長会の献身的な御尽力により、事前の緻密な開催計画の立案、そして当日のきめ細かな運営まで見事に具現できた。心より感謝申し上げたい。本大会を見据えて実施した昨年度のプレ大会の成果と課題が生かされており、参会の各都県の皆さんから大きな評価をいただいた。

万が一を考えた機器の周到な準備、名札を忘れた県外校長への温かい対応など、新潟の優しさとおもてなしの心を感じ取ってもらえたに違いない。また、蒸し暑い中、上着に加えて鮮やかなオレンジ色の帽子までかぶり、街角に立ち続けていた実行委員各位の姿にも頭が下がった。

二 本丸は分散会

本丸の分散会に関しては、プレ大会での経験を生かし、会場案内の分かり

易さ・会場の広さ等、物理的な面で改善が各所で巧みになされた。

そして少人数によるグループ討議を継続導入し、参会の校長一人一人が主体的に協議に参加できるようにした。

実際の分散会では、少人数のため初対面の堅さが早くからほぐれ、時折笑顔も見せながら意欲的に協議を深める様子が多く見られた。

三 校長を主語

校長を主語にして語ることに關しては、昨年のプレ大会での検討の後、各都市校長会で更に磨きをかけて臨んだことにより、大変質の高い提案となった。提案者を中心とした各校長の関係各位の二年間に渡る御努力に心より敬意を表したい。

新潟県小学校長会では、校長研究集会に際して、常に校長を主語にしたレポートを持ち寄り、互いに情報交換しながら自校の学校経営の改善に生かしてきた。これまでの継続の成果が表れたと言える。今後も「校長を主語」にした研究の姿勢をもち続けたい。

来年度は、特別な四年サイクルの最終年度となる地区集会である。関ブロ大会の成果と課題を生かしたい。

大会点描①

組織の一員として機能する 教職員の育成、研修体制の構築

第五分散会（現職教育）では、群馬県邑楽郡邑楽町立小学校長と佐渡市立小学校長の二名が発表を行った。

一 研究発表の概要

(一) 邑楽町立小学校の取組

邑楽郡小学校長会が実施した「組織の一員として機能する教職員」に関するアンケートの結果、教職員に必要な資質・能力として、「①責任感・向上心、企画力②協調性・調整力・コミュニケーション力③判断力、教育的識見」等が、また、学校課題として、「①研修時間・研修機会・研修費用の確保②教職員の意識改革」が浮かび上がった。これらの結果を踏まえ、次の三点を重視した取組が述べられた。

○互いに認め合い、高めあう人間関係を築く会議の効率化

○職員に意欲をもたせ、組織を活性化させる適材適所の校内人事

○目標を共有化して、教職員の研修意欲を高め、全校一致で取り組む校内研修

(二) 佐渡市立小学校の取組

学校教育の充実、その直接の担い手である教職員の資質能力に負うところが大きい。中でも授業力は、児童の成長に直結する力であり、授業で児童の力を伸ばせる教職員は、他の校務分

掌でも成果を上げる。また、授業改善が進めば、生徒指導上の問題も予防できる。このことを学校運営の根底に据え、次の三点について市内全小学校で協働することを提案し、実践を進めた。

○研修体制の構築
○教職員の育成
○市校長会との協働

これらの取組により、市全体の授業力が向上し、NRT、全国学力・学習状況調査の数値が改善傾向にあるとの報告があった。

二 質疑・グループ協議

質疑では、邑楽町立全小学校に配置されている学力向上コーディネーター特別加配の実態について質問があり、それについて情報が提供された。

一方、佐渡市立小学校の取組に対しては、強力なリーダーシップの下、市小学校長会の協働した取組に賞賛の感想が上がった。

グループ協議では、校長の明確な学校経営方針の提示と人間関係づくり、校内研修体制の構築とその推進、校長のリーダーシップと教頭・ミドルリーダーの主体性育成とのバランスの取り方、校長の課題解決に対する意欲の重要性等について話し合った。

大会点描②

まさに本丸！多くの示唆と感動に溢れた
特別支援教育分散会に参加して

「大変感動しました！」第十一分散会（特別支援教育）の新潟市立小学校長による発表が終わった直後、神奈川県参加者からのこんな第一声で分散会協議が始まった。もちろん会場は研究を共有した参加者の満ち足りた雰囲気には溢れていた。

提言は、市内の小学校で四年間に渡り取り組まれた研究の成果であった。最初の二年間は、新潟市特別支援教育行政機関と連携し、市の実態に即した特別支援教育のスタンダードとなるモデルプランの検討。後半の二年間は、そのモデルプランを基にした本校での実践であった。

私は、発表内容の一つ一つに感動し聴き入った。特に心に残ったのは、モデルプランを本校で実践するに当たり、明確にされた校長としてのスタンスであった。

まず本校の課題として「学校教育への位置付け」「特別な教育的支援を必要とする子への対応」「専門的な裏付けによるUDLの実践」を揚げられ、その解決に向け校長としてすべきことを「特別支援教育の学校運営・教育ビジョンへの位置付け」「推進のための人的配置の工夫」「特別支援教育コー

ディネーター（〇〇）を活用した専門性を構築する研修体制」「推進するための予算配置」とし、このスタンスが二年間揺らぐことなく貫かれ「校長が仕組む校内システム改革」として実践されていた。校長の的確で確固たるスタンスが大きな推進力となることを学んだ。さらにその校内システム改革の実践内容では、「専門性を生かせる特別支援教育の〇の複数配置」や

「校内委員会の段階を明確にした具体的な対応策」「職員研修体制」などが、転勤間もない職員にもすぐ実践できるレベルまで整えられていることに感動した。

大規模校の小学校では、なくてはならない手立てであり、大きな成果につながった実践であるが、特別支援学級を含めて四学級の当校でも、ぜひ参考にしたり取り入れたいという素晴らしい取組であった。

開会式で「新潟大会の本丸は分散会である」と近藤朗会長が述べられた言葉どおり、素晴らしい学びと感動をいただいた分散会であった。



大会点描③

学校評価を生かした特色ある
学校づくり、学校経営の推進

第二分散会（学校経営）では、「どのように学校評価を生かして職員の力を引き出し、特色ある学校をつくるか」と題して、胎内市立小学校長から提案発表がなされた。

一 研究発表の概要

最初に、胎内市全小中学校で取り組んでいる胎内市共通評価システムAシート、Bシート、Cシートの「成果とする児童生徒の姿」「具体的方策」「評価基準」を説明し、その後、実践例を基に以下のように主張した。

胎内市共通評価シートの総括評価の妥当性を高めるのは職員の教育実践力であり、それを高めるのは校長が行う日常の教育実践の評価である。

職員の職務へのやる気を向上させることが学校評価に直結する。日々、力を尽くしている職員の取組を見付け、校長室便りを通して、全職員に伝える。このことが学校評価の質の向上と目標達成に直結し、特色ある学校づくりに反映している。

最後に、「職員の取組を認め、生かすのが校長。その成果がささいであれ

ばある程、認める。それが学校評価を機能させる。」と結んだ。

二 協議（グループ）

提案発表後、六グループに分かれて「一 学校評価を活用して職員を育てる校長の役割」「二 学校評価における校長の役割」の二つを中心に協議が行われた。関東各地から参加した各校長との活発な意見交流がなされ、大変充実した会となった。

各グループから、まとめとして、一については、「職員の学校評価への意欲を高めることが、学校評価の質を高める」「教員評価の場で職員に働き掛け自己肯定感を高め育てることが重要」「中堅層を育て、組織力を高めることが重要」等が提案された。二については、「組織や体制の整備には校長の指導力が必要」「校長には、保護者や地域との連携能力も必要」「校長一人ではなく、チームとして職員を育てることが大切」等がまとめられた。

今回の提案協議から、校長の信念が学校評価を大きく左右すること、また、学校評価の活性化のために職員の意欲と力を組織化していくことが校長の使命であることが再確認された。

郡市だより

「学ぶ校長会、行動する校長会」をモットーに

上越市小学校長会

上越市小学校長会は五十三名の会員で構成されており、上越市が目指す「夢や志をもち、たくましく生きる人づくり」の推進に取り組んでいる。

一 活動の重点と組織

「教育活動の改善」「経営者としての資質・指導力の向上」「教育諸条件の改善及び教職員の福利・厚生等に関する調査・要望」「コミュニティ・スクールの推進」の四点を重点に掲げ、活動を推進している。

重点の達成を目指し、「定例校長会」「専門部会」「特設委員会」「ブロック会」「企画委員会」の五つの会を設けている。

二 研修の推進

(一) 課題研修等

「ICT活用研修」「夢・志チャレンジスクール(市補助事業)」「学校運営協議会」「学力向上」等、緊急性、重要性のあるテーマを設定し、校長としてどうリーダーシップを発揮していくかを話し合う研修としている。

必要に応じ講師を招いて指導いただき、それを基に、「校長を主語にした」グループ協議等を行っている。

(二) 情報交換・テーマ別情報交換

「いじめ防止法」「小中連携・小中一

貫教育」「授業のUD化」等、緊急を要する、あるいは周知した方がよい内容について情報交換を行い、学校運営に役立てることとしている。この研修はフリー協議を基本とし、「どんな対応をしたか。どんな成果があったか。課題としてどんなことがあるか。」等について情報交換を重視している。

フリー協議で得られる情報は、そのまま自校の学校経営に役立てることが多いため、情報や方策を共有する重要な研修の場となっている。

(三) 特別研修

今日的課題の研修、現地見学研修等の研修である。昨年度は、高田開府四百年に伴い、高田城(三重櫓)や旧染物屋(高田警女^{ごせ}の歴史)、旧桶店(雁木と町屋)の巡検を行った。

本年度は、中部電力・直江津火力発電所の見学を予定している。

今後も、学ぶ校長会、行動する校長会として、取組を継続するとともに、上越市の教育の発展のために努力していく。



学校紹介

地域に根ざした教育活動を

目指す学校

佐渡市立小木小学校

佐渡市立小木小学校は、佐渡島の南端に位置しています。学校の教育目標「なかよく かしくく たくましい子」の下、七十四名の児童が元気に学校生活を送っています。

小木小学校は、平成二十七年四月一日に校舎を移転しました。南佐渡中学校に統合された旧小木中学校の校舎を改築しての移転です。旧校舎での学習が始まったのは、昭和四十五年です。以来四十五年間、子どもたちの成長とともにあった校舎でした。眼前には、佐渡金銀山で採掘された金銀の積出し港や北前船の寄港地として栄え、

昨年開港四百年を迎えた小木港が広がります。新校舎が建つ「桜ヶ丘」からも、この小木港を眺望することができます。この新校舎でも引き続き、佐渡固有の自然、歴史、文化を学ぶ教育



新校舎



太鼓体験

は、縦割り班を生かした体験活動を実施しています。その活動の一つである太鼓体験は、「児童」の支援をいただいて実施

しています。地域の皆様に支えられた小木小学校です。小木の地にある教育的資源を十分に活用し、これからの地域の特色を生かした教育活動に全力で取り組んでいきます。